

鉛汞小考

加藤千恵

はじめに

現在の研究において、外丹の藥物中毒問題が表面化した後、唐代後期に内丹が外丹の用語や理論を受け継ぐかたちで、より安全なものとして生み出されたと一般にはいわれている。薬害の問題は、内丹が隆盛する大きなきっかけとなったことは確かであろうが、内丹の發生に關しては、必ずしも先行する外丹要素をそのまま取り入れたわけではないし、また、薬害が騒がれるようになる唐代を待つ必要もなかったと推測される。内丹と外丹の關係については、まだ明らかになっていないことが多いが、

今回、内丹書にも外丹書にも共通して見られる「鉛」と「汞」という二つの藥材に着目することで、内丹と外丹の新たな關係が見えてきた。内丹が誕生したといわれる唐末頃、薬害によって揺らぎかけていた鑛物薬に對する信賴を取り戻すべく、外丹もまた新たに生まれ變わろうとしていたようである。その動きには『周易參同契』が大いに關わっていたと考えられる。内丹と外丹と『周易參同契』、この三者の關係について、鉛汞を中心にとらえなおすことでわかってきたことを論じてみたい。

一、鉛汞の流行

鉛と汞は、煉丹術書において、混ぜ合わせるべき薬材の代表的な組み合わせの一つとされる。汞とは丹砂から抽出した水銀の意である。次の韓愈や白居易の詩文から唐代には実際に鉛と汞を混ぜ合わせて作られた丹薬が服用され、鉛汞の語は煉丹術の代名詞のように使われていたことがうかがえ、この二薬は煉丹術を實踐する者たちの間に止まらず、廣く世間に認識されていたことがわかる。

韓愈の「故太學博士李君墓誌銘」(八二三)もしくは八二四年)によると、韓愈の兄の孫娘の婿である李于は、方士柳泌から授かった薬法によって作った丹薬を服用し、長慶三年(八二三)に四十八歳で亡くなっている。その方法とは、「鉛で鼎を満たし、中央を押さえてくぼみを作り、そこに水銀を注いで埋め、蓋をして四隅を密封し、焼いて丹砂を作る」というものである。韓愈は、李于ばかりでなく、數え切れないほどの人々が命を失ってきた

というのに、世間は丹薬の服食をますます慕い尊んでいることを、世の惑亂であると憂えている。

その韓愈も硫黄を服用していたことが、白居易の「思舊」という詩に詠まれている。そこには韓愈を含む四人の舊友が丹薬を煉成したり服用したりしていたことが述べられており、命を永らえようと努力した彼らがみな中年を過ぎることなく亡くなってしまったのに對し、攝生をせず「汞と鉛を識らず」に過ごした自分だけがかえって長生きしたと語られている。韓愈らが服用していたのは必ずしも鉛や汞ばかりではないが、白居易はそれらをまとめて「汞と鉛」という言葉に置き換えている。このことから、この詩が詠まれた九世紀前半には、煉丹術の總稱として鉛汞が定着していたことがうかがえる。

鉛汞を用いた煉丹術の最も早い例として、『周易參同契』を挙げたいところであるが、實は、『周易參同契』に鉛と汞を混ぜ合わせることを明記した部分は見当たらない。したがって、現存する記事の中で最も早い例は、『抱朴子』(一三七)年)黄白篇に見える「小兒作黄金法」

という鉛と汞による黄金作りの方法であろう。鉛十斤を鐵釜で熱して溶かし、汞三兩を加えて先に浮き出てきたものを「良非」という。汞一斤、丹砂半斤にその良非半斤を加えて混ぜ合わせ、汞が見えなくなったら小さな器に入れ、雲母をその上に置いて鐵で蓋をする。爐にかけた大きな器の中に小さな器を入れ、小さな器が上半寸をのこして見えなくなるまで鉛を注いで加熱し、鉛が溶けてからさらに猛火で三日三晩焼くと「紫粉」が完成する。

鉛十斤を鐵の器に入れて溶かし、二十日ほどしてから銅の器に入れ、鉛がすっかり溶けたら一方寸のさじ七杯の紫粉を入れて混ぜると、たちまち黄金ができるという。

ただし、その黄金は長生するために服用するものであるとは記されていない。『抱朴子』において、汞と化す丹砂は最上の仙薬とされているものの、鉛はとくに重視されているわけではなく、仙薬篇に列擧される仙薬の中には含まれていない。

では、なぜ鉛は汞と結びつけられたのか。唐代八世紀前半頃の陳少微は、陽の性質をもつ丹砂を制するために

は、陰の性質をもつ薬材と混ぜ合わせる必要があるとする⁽²⁾。彼は、五金と呼ばれる鐵・銅・銀・鉛錫・金の中で鉛が最も陰の性質が強いとしながらも、丹砂を制するものとして擧げているのは、曾青・空青などの石薬であり、鉛ではない。

二、幻の組み合わせ——『周易參同契』における鉛と汞

『周易參同契』には、鉛と汞の融合が説かれていないにもかかわらず、鉛汞を用いる煉丹術の淵源といわれることが多い。実際に『周易參同契』において壽命を延ばすと考えられているのは還丹、すなわち金である⁽⁴⁾。まず、その金がどのような材料から煉成されるのかを説く一節を見てみたい。

胡粉は火中に投ずれば、色壞れ還りて鉛と成る。

氷雪は温湯を得れば、解釋して太玄と成る。金は砂を以て主と爲し、和を水銀に稟く。變化は其の眞に

由りて、終始自ら相い因る。服食の仙と作らんと欲すれば、宜しく同類なる者を以てすべし。禾を植うるに當に黍を以てすべく、鷄を覆すに其の卵を用うべし。〔周易參同契〕上篇。本文は『周易參同契發揮』による。(以下同じ。)

仙薬を服食して仙人になろうとするならば、「同類」を用いて仙薬を作るべきだという。鉛を焼いて作った白い胡粉は、火に投じるとまた黒い鉛になる。水が凝結してできた氷や雪は、湯をかけるとまた水になる。同類とはすなわち、胡粉と鉛、氷雪と水のように、互に行き來可能なもの同士のことである。ここに金と關連させて丹砂と水銀を擧げるのは、それらが金と同類であり、金を作る材料となり得ると考えられているからであろう。

南宋の陳顯微は『周易參同契』のこの一節に對する注釋において、太陽から生まれ出た眞精によって丹砂が結成され、その丹砂の中にはすでに眞汞すなわち水銀があり、それが悠久の時間をかけて白銀になり、やがて黄金

に變化すると述べたうえで、丹砂と水銀を合わせて黄金へと煉成する過程を説明している。ところが、陳顯微は『周易參同契』の本文に述べられていない要素を織り込んでさらに説明を續ける。眞鉛も同類であるとして、丹砂と水銀を煉成してできた黄金に、眞鉛を混ぜ合わせるプロセスを持ち出してくるのである。

今者、煉丹の初め、先ず陽精を採り、變化して砂と爲し、次に水銀を取り、砂と相い合し、二物を研和し、煅煉して金を成す。既に已に金を成せば、方めて鉛を用て養う。……眞鉛を得るを須ちて、始めて服食に堪う。眞鉛は太陰より生ず、故に同類と曰う。

(陳顯微注『周易參同契解』)

陳注によれば、丹砂はそもそも太陽から生まれ出たものであるから、それから作られた黄金も陽の精氣によって結成されたものである。それを服食するには、丹砂の同類であり、なおかつ太陽とは對極の性質である太陰から

生じた鉛と混ぜ合わせる必要があるという。『周易參同契』本文においては、互いに變化して往來可能なものを同類と稱していたのであり、水銀は丹砂と金と、鉛は胡粉とそれぞれ同類とされていたが、注においては、同類は匹敵する陰陽二物の意味とされ、水銀の相手は鉛へとすり替えられている。宋末元初の俞琰もこの一節に對して、北宋の『悟真篇』(二〇七八年後序)の解釋をふまえたうえで、眞汞と眞鉛を一對の陰陽で、氣の感じ合う同類であると注釋している。

悟真篇に云う、「竹破るれば竹を將て補うを須ちて宜し。鶏を覆すに當に卵を用て之れを爲すべし。

萬般類に非ざれば徒らに力を勞し、争でか眞鉛の聖機に合するに似ん」と。蓋し謂えらく、眞汞眞鉛を得れば、則ち一陰一陽、氣類相い感ず、是れ同類爲り。(俞琰注『周易參同契發揮』一三二〇年)

『悟真篇』はテキストによって異同が多いが、ここに

引用される『悟真篇』の四句は、各テキストに収録される本文とおおむね一致する。二句目の鶏を孵すには卵を用いよという内容は、先に掲げた『周易參同契』の一節にも見えることから、『悟真篇』が『周易參同契』の説を取り入れて、自らの内丹理論を主張していることがわかる。「眞鉛が聖機に合一する」というのが、俞琰が注釋するように、眞鉛と眞汞との合一を表しているのかどうかはつきりとはわからないが、『悟真篇』にはこのほかにも鉛と汞を一對の藥材として詠み込んだ詩句が散見されることから、『周易參同契』に見える水銀と鉛とを同類として結びつけたのは、俞琰らよりも『悟真篇』の方が先だといえる。

『周易參同契』は、後漢の魏伯陽の作とされているが、確かなことはわかっていない。多くの内丹および外丹の書によって引用され、主に内丹として解釋する注釋書が幾つも作られ、「萬古丹中の王」「萬古丹經の祖」と稱される書物であるが、後漢や六朝時代の文獻には『周易參同契』の用語や思想はほとんど見られない。⁽⁸⁾ その影響が

顯著に見られるようになるのは、唐代になってからである。その文章は隱喩に満ち、多様な解釋が可能であるため、今日、『周易參同契』に由來する煉丹術用語や理論とされているものの中にも、『周易參同契』が當初から煉丹術を意圖して説いたものかどうか分からないものがある。

一例を挙げると、唐末から宋初の成立と考えられる外丹書『參同録』⁽⁹⁾は、鉛と汞を一つに合わせることで生じた黄芽を八兩、さらに同量の汞と合わせて一斤(十六兩)の藥を煉成するという。一斤は三百八十四銖(二十四銖×十六兩)であるから、易の三百八十四爻(六爻×六十四卦)の數とも一致する。つまり、易の爻によって象徴される森羅萬象が、この一塊の丹藥の中に凝縮されていることを暗示している。

黄芽八兩を上弦と爲し、汞八兩を下弦と爲し、上下兩弦、共に合すれば一斤。每斤一十六兩、每兩二十四銖。一斤に三百八十四銖を計うるは、其の爻數

に應ずるなり。

〔參同録〕

二つの八を合わせて一斤とし、一斤に相當する三百八十四銖が易の爻數に應じるといふ説は、『周易參同契』にそのまま見られる。しかし、そこには鉛や汞や黄芽といった藥物名は見られない。

上弦兌の數は八、下弦艮も亦八、兩弦其の精を合して、乾坤の體乃ち成る。二八は一斤に應じ、易道は正しくして傾かず、銖に三百八十四あるは、亦卦爻の數に應ず。
(『周易參同契』上篇)

「上弦」と「下弦」は半月のことであり、『參同録』は丸藥を月に見立て、上弦の月と下弦の月を合わせて満月を作るように、黄芽と汞を合わせて一つの丹藥を作ることを表している。もともと『周易參同契』における「八」は、新月から數えて上弦に至るまでの八日間と満月から下弦に至るまでの八日間であるが、『參同録』はこれを

黄芽と汞の分量として解釋している。

『參同錄』はさらに十二消息卦、十か月の懐胎期間、卯酉、乾坤坎離の四卦を除く六十卦などを煉丹術の火候に關するものとして明示している。これらの要素は『周易參同契』中にも見えるが、ここではとくに煉丹術とは關連づけられていない。『周易參同契』に長生を旨指して煉成する還丹について説く箇所があることは先に見た通りであるが、それが明確に表れているのは、全篇の一部に限られる。『周易參同契』全體にわたって説かれてるのは、易の卦や五行や『老子』の言葉などによって象徴的に表される天地萬物の道理といえるようなものであるが、『參同錄』はそれらの多くの要素を煉丹術と結びつけようとした。

また、後世の注釋家たちも、『周易參同契』中において、煉丹術と直接關係があるとは思えない一對で提示されるものを鉛汞と見なし、鉛汞説を構築してきた。たとえば、『周易參同契』中篇に見える「河上の姪女は、靈にして最も神。火を見れば則ち飛び、埃塵を見ず。鬼の

ごとくに隠れ龍のごとくに匿れ、存する所を知る莫し。將に之れを制せんと欲すれば、黄芽を根と爲せ」に對し、五代の彭曉⁽¹⁰⁾と俞琰は、「姪女」を汞、「黄芽」を鉛に當てはめて、次のように注釋する。

河上の姪女は、眞汞なり。火を見れば則ち飛騰し、鬼の隠れ龍の潛むが如く、往く所を知る莫し。或いは之れを擬制せんとすれば、須らく黄芽を得て母と爲し、養育して存せしむべし。黄芽は即ち眞鉛なり。

(彭曉注『周易參同契通眞義』第七十二)

眞汞は離より産まる。離は女爲りて午に居る。分野を以て之れを言えば、午は三河爲り、故に河上の姪女と稱す。……其の性は猛烈にして、火を見れば則ち飛走し、蹤無きこと鬼の隠れ龍の匿るるが如く、存する所を知る莫し。黄芽を用て根と爲すに非ざれば、何を以て之れを制せん。黄芽は即ち眞鉛なり。汞は眞鉛を得れば、擒え制せられて交結し、然る後

に飛走する能わず。此之れを用て金丹の根と爲す所以なり。
 (龔球注『周易參同契發揮』)

ほかに、後世の注釋家たちが『周易參同契』中の語句を、鉛と汞、もしくは鉛汞の融合したもの、または融合時の反應の様子に解釋する例は多い。¹¹⁾

三、『周易參同契』への注目と外丹の理論化

『周易參同契』が後漢に作られたことが事實だとするならば、成立してから數百年間、ほとんど誰にも顧みられなかったということになる。後漢成立説を疑う見方もあるが、¹²⁾ここではひとまず成立については問題にせず、なぜ唐代になって突然注目されるようになったのかを推測してみたい。

比較的早い段階で『周易參同契』について言及しているのが、唐の玄宗の時の劉知古で、その著『日月玄樞論』(『全唐文』卷三三四所收。『日月玄樞篇』と題して『道樞』卷二十六にも収録される)では、『參同契』に基づく

とされる還丹を、道の祕する最高の價值があるものとして
 いる。

且つ道の至祕は、還丹に過ぐるは莫し。還丹の驗に近づくには、必ず龍虎を先にす。龍虎の自りて出づる所は、參同契に若くは莫し。(『日月玄樞論』)

『周易參同契』に還丹の語が見えるものの、それが何から煉成されるのか具體的には記されていないが、『日月玄樞論』においては、還丹は龍虎と呼ばれる藥材から煉成されるという。その龍と虎の指すものは搖れがあつてはつきりと定まてはいないが、龍は、丹砂から水銀、水銀から丹砂へと變化する「流珠」であり、それは「日」でもあるとし、虎は、黒鉛から黃丹、黃丹から黒鉛へと變化する「黃芽」であり、それは「月」でもあるという。¹³⁾

夫れ流珠は龍爲り、龍は即ち日なり。黃芽は虎爲

り、虎は即ち月なり。此の二物は、日月の精氣にして、成變化の理有り。故に之れを餌す者は、亦能く變化す。所謂變化は、丹砂を變じて水銀と爲すは、陽自り陰に返すなり。水銀を復して丹砂と爲すは、陰自り陽に返すなり。故に流珠丹、亦火青丹と名づく。黒鉛を變じて黃丹と爲すは、陰自り陽に返すなり。黃丹を化して黒鉛と爲すは、陽自り陰に返すなり。二物は、之れを陰と謂わば倏然として陽と爲り、之れを陽と謂わば忽然として陰と成る。互いに夫婦と爲り、更ごも父母と爲る。(『日月玄樞論』)

『參同錄』や『大丹鉛汞論』によると、山澤に天の日月の光が降り注ぎ、それに感じて、五金、八石、珠玉が生じるといふ。中でも、還丹を作ることのできる藥材である眞汞は、日の精氣が凝縮したものであり、眞鉛は、月の精氣が凝縮したものであるといふ。したがって、鉛汞を服用するということは、日月を服用することにも等しい行爲と考えられていたのである。劉知古が龍虎を日

月と稱したのも、おそらく同様に、還丹はこの世で最上の陰陽に當たる日月を用いて作るものだと考えたからに違いない。

また、前章で見たように、『參同錄』には『周易參同契』中の幾つかの用語や文を組み合わせて構築した理論が述べられている。そこに『周易參同契』の書名は見えないものの、『參同錄』という書名は強く『周易參同契』を意識してつけられたものと考えられる。『參同錄』は、これまで行われてきた煉丹術を批判し、多くの人々が黒鉛を眞鉛と見なしたり、水銀を眞汞としたり、鉛黃華を黃芽としたりして、五金八石と總稱されるさまざまな藥物を誤って用いているといふ。そのうえで、鉛汞でなければ還丹を造ることはできないと明言している。

鉛汞は、是れ天地の至寶、日月の靈氣にして、法象は之れを龍虎と謂う。一切萬物の内、唯だ鉛汞の還丹を造るべき有るのみ。餘は皆法に非ず。

鉛汞を一對の藥材として重んじるこのような考え方は、唐代の煉丹術書の中に少しづつ見られるようになるが、『參同錄』はその理論の完成形ともいべきものを具えているといえる。

北宋の『丹論訣旨心鑑』¹⁴も、『參同錄』と同様に、外丹術自體を否定するのではなく、やり方が間違っていたのだとする。

參同契に云う、諸術甚だ衆多にして、千條に萬餘有り。即ち知る、大丹の妙は、唯だ鉛汞二物のみを至藥と爲す。四黄八石を用うるに非ず。……若し礬石・硫黄・礪砂等を用て、煨伏して藥と爲して之れを服すれば、大毒有りて、久久にして人を損す。

「礪砂」¹⁵乃ち銅を食し鐵を壞すの功有り、豈に服食に堪えんや。礬石に虎を殺すの能有り、此深戒と爲すべし。大凡そ學び一小法を傳受し得て、即ち世人に雙ぶもの少なしと言ひ、丹を將て人に與えて之れを服せしめ、倏ち天横の斃有るは、深く之れを哀

しむべし。自後見る者は嫌を生じ、皆丹石は瘡癩癰腫を發すと云う。蓋し此謬惑の徒、金丹の功を毀謗すれば、服餌すべからざるなり。

(『丹論訣旨心鑑』序訣章第二)

全體の冒頭に『參同契』が引用されるが、『周易參同契』の本文に見られるのは、「諸術甚だ衆多にして、千條に萬餘有り」(上篇)の二句のみであり、『周易參同契』では後に續く文に鉛汞などの藥物名は見られない。しかし、『丹論訣旨心鑑』は、この二句に全く異なる内容を繼いで、『周易參同契』を鉛汞を提唱する書に見せかけようとしている。さらに、礪砂や礬石など、そもそも人が服用に堪えられないほどの猛毒をもつ礦物を服用する者や、でたらめな煉丹術士が現れたために、死者が出、外丹が誤解されるようになったのである。つまり、當時の人々が、『周易參同契』がもともと提唱していた正しい方法を実施していないことが問題だったのであり、そもそも外丹は最初から間違っただけでなく、主張して

いるのである。

『丹論訣旨心鑑』は、「薬を用いず、五行を用いよ」〔序訣章第一〕、「金丹論章第三」と宣言し、水銀八兩と鉛八兩を龍虎とし、合わせて一斤とすることで天地を象徴する數に合致させるなど、理論ばかりを説き、具體的な丹藥煉成の手順の説明はない。このような外丹説は、理論の構築が目的となり、もはや實踐を旨とするものではなくなっていたのかもしれない。

四、内丹と外丹

鉛汞説は外丹側で整備されてきたように見えるが、唐末頃に成立したとされる内丹書『入藥鏡』にも、「鉛龍は昇り、汞虎は降る。二物を驅りて、縦放せしむる勿かれ」と、龍虎と鉛汞とを結びつけた説が見えている。

内丹と外丹の影響関係については、はっきりしたことはわからないが、内丹が誕生したといわれる唐末頃、外丹もまた新たに生まれ變わろうとしていた。その際に、内丹外丹の雙方が『周易參同契』にその理論的根據を見

いだし、理論の整備を圖つたのではないか。とくに宋代以降に成立した煉丹術書には、内丹か外丹かを問わず『周易參同契』を換骨奪胎した理論を具えているものが多く見られる。『參同錄』中に見える理論は、たとえば内丹を説く『悟眞篇』にもほぼ共通して見られ、内丹と外丹の協調性を感じずにはいられない。

『大丹鉛汞論』は外丹を説く書であるにもかかわらず、『悟眞篇』や『鍾呂傳道集』といった内丹書を據り所として鉛汞について説明する⁽¹⁶⁾。また、「丹經の言は妄りに發せず、……鉛汞制伏し、黃婆會遇す。外丹夫れ何ぞ遠きこと之れ有らん」(第二)、「嘗て聞く、異人曰く、天は地を盗み、地は人を盗み、人は萬物を盗む。三才相い盗むの道なり。外丹の術、是に由らざるは莫きか」(外丹大乘濟物利人肥身養道)という『大丹鉛汞論』の記述からは、先行する理論が丹經や異人の言葉として説かれており、外丹もその理論と同じであると述べているように見える。「黃婆」が姪女の媒介者となることは『入藥鏡』に見え、⁽¹⁷⁾天地人が盗み合うという考えは『陰符經』

に見える。⁽¹⁸⁾さらに、「直^{ただ}天地と其の軌轍を同じくし、内丹と其の關鍵を同じくす」(脱養嬰兒)という言葉からは、その先行する理論は内丹で用いられているものと同じである可能性も読み取れる。

また、『日月玄樞論』、『參同錄』、『大丹鉛汞論』における、日月の精華を最上の陰陽二藥として用いるという考え方は、六朝時代の日月存想法を土臺としているように思われる。『日月玄樞論』に次のようにいう。

世人は徒らに還丹の以て度世すべきを知るも、即ち度世の理、何従り生ずるかを知らず。蓋し日月の精華を餌するが故なり。……黄庭經に、「日月の精華老殘を救う」と云う所以は、豈に二景の事に非ずや。答えて曰く、二景の暉を媾する者は、其の徒實に繁く、五晨の霞を服する者は、數亦少なからず。然れども此の道に當たりて、世に住まり長生する者鮮し。一藥を餌し、一丹を服するに至りて、延駐長生を獲る者、目に見る所多し。⁽¹⁹⁾

(『日月玄樞論』)

『日月玄樞論』は、還丹によって度世できるのは「日月の精華」を服用するからだと述べる。しかし、『黄庭經』に説かれるような日月「二景の暉」を交合せせることを實踐する者は多くとも、長生する者は少ないという。やはり鑛物となったものを煉成して作った丹薬を服用してはじめて長生する者が多くなるというのだ。それこそが『周易參同契』に説かれる藥材によって作られた還丹である、と主張したいのだ。

「日月の精華老殘を救う」は『黄庭内景經』中の一句であり、日月を存思する方法は『黄庭經』の至る所に説かれている。たとえば、次のように、日月の神を會わせて作った糧を「子丹」なるものに與えることを存思する方法が説かれている。

日月列布して陰陽を設け、
兩神相い會して玉漿²⁰を化す。
淡然無味の天人の糧、

子丹に饌を進めん、肴は正黄たり。(『黄庭内景經』)

『黃庭內景經』に子丹の居場所は明示されていないが、子丹の食べものの色は五行の土に配當される黄色であり、臟腑でいえば脾と胃の色であるから、その邊りに宿ると想定されているのだろう。もしそうだとするならば、日月を合してできたものは、子丹ばかりでなく、子丹の宿る修行者の胃袋をも満たすことになるだろう。

體內で日月等によって象徴される陰陽の二氣を合一させる存想法は、『黃庭經』ばかりでなく、六朝時代の他の經典にも數多く見られる。その一つである『老子中經』(『雲笈七籤』卷十八所收。『太上老君中經』と題して道藏にも収録される)にも子丹が登場する。修行者は兩目もしくは兩乳に日と月を存思し、それぞれから流れ出した精氣を合一して胃に流し入れ、あたかも胎兒を養うかのように、胃に宿る神「子丹」「赤子」「吾」とも呼ばれる)に與えて養うことが説かれている。養われて成長した子丹は、やがて子丹を養う修行者と一體化する。つまり、天地の間に修行者がいて修行者の體內に子丹がいるという入れ子式の構造が一つに重なり、神に氣を供給し

て養っている修行者自身が、じつは日月の氣を受けて養われるということになる。

常に思え、兩乳下に日月有り、日月中に黃精赤氣有り、來たりて絳宮に入り、復た來たりて黃庭紫房中に入るを。黃精赤氣 太倉中に填滿す。赤子 胃管中に當たりて正に南面して坐し、黃精赤氣を飲食すれば、即ち飽く。(『老子中經』第十一神仙)

また、『洞真太一帝君太丹隱書洞真玄經』(以下『太丹隱書』)という六朝時代の道教經典にも同様の方法が見える。鼻孔下に日月を存思し、日中の黃精赤氣と月中の赤精黃氣を胃に流入させ、「我」と呼ばれる神を養う。

「我」は修行者自身の姿に存思される。體內の「我」に供給される日月の精氣は、精が質(本體)であり、氣はそれを取り巻く煙であると説かれることから、日は黃の本體が赤氣で煙り、月は逆に赤の本體が黃氣で煙る状態である。黃は陰、赤は陽を表すから、⁽²¹⁾黃精赤氣は陽中の

陰、赤精黃氣は陰中の陽である。この二氣が胃に集まり、そこに神と一體化した「我」が飲食に赴く。

思存すらく、兩鼻孔下、左に日有り、右に月有り、日中に黃精赤炁有り、月中に赤精黃炁有り。精は、二明の質なり。色炁は、日月の煙なり。二炁鬱鬱として來たりて絳宮に入り、絳宮溢滿すれば、二氣復た上りて洞房中に入り、洞房中鬱滿すれば、又下りて黃庭中に至る。黃庭中は、臍下三寸下丹田宮中なり。二炁既に滿つれば、又入りて太倉中に填溢し、二炁洞徹して、鬱鬱として胃管中に積む。存すらく、太一上行して正に胃管中に當たりて、南に向かいて下丹田黃庭真人を呼召し、……太一と共に坐し、精炁を飲食すること二十七咽。(『太丹隱書』)

『老子中經』や『太丹隱書』において養われる神が宿る場である胃は、五行の土に配當される臟腑である。陽中に陰を含むものと陰中に陽を含むものを五行の土にお

いて交合せせるのは、後の内丹によく見られる構圖である。⁽²²⁾

唐末頃に現れた新しいタイプの外丹の特徴は、『周易參同契』の用語を用いて新たに構築した煉丹の理論を具えていることである。その理論は内丹とも共通していて、鉛汞や龍虎や日月で表される陰陽二物の合一による生成論が基本となっている。そして、六朝時代の存想法にはもともと日月合一の陰陽説が具わっていた。

おわりに

鉛や水銀という礦物名が古くから用いられ、内丹が成立した後もその名をもって藥物を表したため、外丹から内丹が生じるという流れで煉丹術の歴史がとらえられてきたが、陰陽をはじめとする理論の活用という観点から見れば、その流れは必ずしも外丹から内丹への一方通行という單純なものではない。ほぼ時を同じくして、『周易參同契』が脚光を浴びるようになり、内丹が形成され、實踐よりもむしろ理論を重視する外丹が現れた。内丹と

理論的外丹とは、理論を共有している。ここから、内丹の前身と考えられる六朝の存想法と、唐代中期以前の實踐的外丹とが、『周易參同契』から同じ要素を吸収し、表裏の關係と呼べるほどの緊密なやりとりを経て新たな煉丹術へと生まれ変わったことが推測される。その生まれ変わる時点で『周易參同契』が鉛汞説を提供した、というのであれば、話はわかりやすいのだが、『周易參同契』に鉛と汞を混ぜ合わせることは説かれていない。近年の研究において、『周易參同契』を淵源とする「鉛汞派」の存在が指摘されているが、むしろ、鉛汞を支持する者たちが『周易參同契』を鉛汞の祖として擔ぎ出したのではないだろうか。どういう経緯で鉛が水銀の相手として定着したのか、鉛汞の合一が『周易參同契』とどう結び着いていったのか、これらを解き明かすことが、内丹と外丹の歴史を解く鍵になると思われる。

註

(1) 『白氏文集』卷六十二「思舊」「閑日一思舊、舊遊如目

前、再思今何在、零落歸下泉。退之服流黃、一病訖不痊。微之鍊秋石、未老身溘然。杜子得丹訣、終日斷腥羶、崔君誇藥力、經冬不衣綿。或疾或暴夭、悉不過中年。唯予不服食、老命反遲延。況在少壯時、亦爲嗜欲牽。但耽葷與血、不識汞與鉛。……」。

(2) 『大洞鍊真寶經修伏靈砂妙訣』陰陽伏制及火候飛伏訣「經曰、陽精火也、陰精水也。陰陽伏制、水火相持。故知水炭不同處、衰盛終有歸。且丹砂是陽精、而須陰制。陰制者水也。常用曾青・空青・石鹽・馬牙硝・玄英・化石、是也」。

(3) 『大洞鍊真寶經九還金丹妙訣』中三品陳五石之金品第四「且鐵所稟南方陰丁之精、結而成形。銅所稟東方乙陰之氣、結而成魄。銀稟西方辛陰之神、結精而爲之質。鉛錫俱稟北方壬癸之氣、錫受王精、鉛稟癸氣、陰終於癸、故鉛所稟於陰極之精也。金則所稟於中宮陰己之魄」。

(4) 『周易參同契』上篇「巨勝尙延年、還丹可入口。金性不敗朽、故爲萬物寶。術士服食之、壽命得長久」。

(5) 同類については、村上嘉實「周易參同契における同類の思想」(『中國古代科學史論續篇』京都大學人文科學研究所、一九九一年)参照。

(6) 『周易參同契解』「至寶之生、本出乎太陽、真精結靈、聚秀初結成硃砂、即其中已有真汞、真汞離母、則曰水銀、水銀在大冶之中、爲太陽所煉、歲久凝爲白銀、白銀歷久

始變黃金」。

(7) 絶句六十四首中の一首。『紫陽真人悟真篇註疏』は三句目を「萬般非類徒爲巧」に作る。

(8) 『參同契』という書名が見れるのは、後漢の虞翻の易注(原書は散佚。唐『經典釋文』に引用される)が最も早い。虞翻は『參同契』という書物から引用するかたちで、「易」の字は「從日下月」と述べている。これと同じ表現は現存する『周易參同契』には見られないが、「日月爲易」の句が見える。晋の『抱朴子』遐覽篇に「魏伯陽内經」と見えるが、『周易參同契』を指すのかどうかは明らかでない。また、梁の陶弘景が『真誥』卷十二に注して「易參同契」を引用するが、現行の『周易參同契』とは一致しない。『周易參同契』という書物が存在したことを示す確実な記録としては、『舊唐書』經籍志が魏伯陽の著作として『周易參同契』二卷と『周易五相類』一卷を挙げるのが最も早い。『周易參同契』の成立については、王明『周易參同契考證』(國立中央研究院歷史言語研究所集刊)第十九本、商務印書館、一九四七年)、鈴木由次郎『漢易研究』(明德出版社、一九六三年)、第四部 周易參同契の研究、第一章 周易參同契の成立、陳國符『說周易參同契與内丹外丹』(道藏源流考)中華書局、一九六三年)、福井康順『周易參同契考』(『東方學會創立二十五周年記念 東方學論集』東方學會、

一九七二年)、吾妻重二『宋代思想の研究—儒教・道教・佛教をめぐる考察』(關西大學出版部、二〇〇九年)、II 道教の研究、第一章『易教』の理論と道教、二 煉丹術と『易教』—『周易參同契』について、参照。

(9) 『諸家神品丹法』卷二に収録される。そこには孟要甫という人物が至人に會つて藥物を傳授され、『金丹秘要參同錄』を作ったと述べられている。陳國符『中國外丹黃白法考』(上海古籍出版社、一九九七年)鉛汞擬說考源、山田慶兒『本草と夢と鍊金術と』(朝日新聞社、一九九七年)紫金の光、姜生・湯偉俠主編『中國道教科學技術史』南北朝隋唐五代卷(科學出版社、二〇一〇年)第十二章は中唐から五代末の成立とし、ニードム SCIENCE AND CIVILISATION IN CHINA, volume5, Chemistry and Chemical Technology, part4, Cambridge University Press, 1980, pp257-258' は宋代とする。

(10) 欽偉剛氏は、彭曉『周易參同契通真義』は朱熹『周易參同契考異』本の基準で改正され、南宋後期に刊行されたとする(「朱熹と『參同契』テキスト」、『中國哲學研究』第十五號、東京大學中國哲學研究會、二〇〇〇年)。

(11)

| | |
|---|--|
| <p>『周易參同契』 注釋者 唐・無名氏 〔道藏〕容字 號) ※1</p> | <p>鉛汞が反應する様子に解釋される『周易參同契』中の語句</p> |
| <p>坎離匡郭 天地設位而易行乎其中矣 幽潛淪匿 坎戊月精、離己日光、日月爲易、剛柔相合 青赤白黑、各居一方、並由中宮所稟戊己之功 出入更卷舒 雄陽播玄施、雌陰化黃包 混沌既交接、權輿樹根基 冠婚氣相紐 故易統天心 蟾蜍與兔煥、日月兩氣雙、蟾蜍抵卦節、兔者吐生光 東北喪其朋 壬癸配甲乙 原本隱明、內照形骸、閉塞其兌、築固靈株、三光陸沈、溫養子珠 知白守黑、神明自來、白者金精、黑者水基、水者道樞、其數名一 若有若无、髣髴大淵、乍沈乍浮 採之類白、造之則朱 混而相扶 陰道厭一九、濁亂弄元胞 食氣鳴腸胃、吐正吸所邪 百脈鼎沸馳、不得清澄居 遽以天命死、腐露其形骸 偃月法鼎爐、白虎爲熬樞、汞日爲流珠、青龍與之俱 舉東以合西、魂魄自相求</p> | <p>鉛汞に解釋される『周易參同契』中の語</p> <p>坎(鉛)・離(汞)</p> <p>戊(鉛)・己(汞)／月(鉛)・日(汞)</p> <p>青(汞)・赤(硃砂)・白(金精)・黑(鉛)</p> <p>雄陽(汞)・玄(鉛)・雌陰(金公)※2</p> <p>樹(汞)・根基(黃芽)※3</p> <p>易(鉛汞)</p> <p>蟾蜍(鉛)・兔(汞)</p> <p>壬癸(鉛)・甲乙(汞)</p> <p>靈(汞)・株(金花)・子珠(汞)</p> <p>白(水銀)・黑(金公)</p> <p>有(汞)・无(鉛)</p> <p>一(鉛精)・九(汞)</p> <p>正(汞)・邪(鉛)</p> <p>白虎(金花)・青龍(汞)</p> <p>東(汞)・西(鉛)／魂(汞)・魄(鉛)</p> |

| | | |
|----------------------------------|--|---|
| <p>唐・陰長生 ※4</p> | <p>上弦兌數八、下弦數亦八、兩弦合其精、乾坤體乃成、二八應一斤、易道正不傾、朔受日之符、呼吸相貪欲、佇思爲夫婦、水盛火消滅、俱死歸厚土、金以砂爲主、稟和於水銀、以金爲隄防、水入乃優游</p> | <p>上弦(汞)・下弦(鉛花) 水(鉛)・火(汞) 金(鉛花)</p> |
| <p>五代・彭曉 〔周易參同契 通真義〕</p> | <p>以無治有、器用者空(上篇) 肉滑若鉛(中篇) 河上姤女、靈而最神、得火則飛、不見埃塵、鬼隱龍匿、莫知所存、將欲制之、黃芽爲根(中篇) 枝莖華葉、果實垂布、正在根株(下篇)</p> | <p>無(汞)・有(鉛) 河上姤女(眞汞)・黃芽(眞鉛)</p> |
| <p>南宋・朱熹 〔周易參同契 考異〕</p> | <p>知白守黑、神明自來(上篇) 偃月法鼎爐、白虎爲熬樞、汞日爲流珠、青龍與之俱、舉東以合西、魂魄自相拘(上篇) 坎離沒亡(上篇)</p> | <p>白(汞)・黑(鉛) 白虎(鉛)・青龍(汞)／東(汞)・西(鉛) ／魂(汞)・魄(鉛)</p> |
| <p>南宋・陳顯微 〔周易參同契 解〕</p> | <p>金以砂爲主、稟和于水銀、變化由其眞、終始自相因、欲作服食仙、宜以同類者(上篇) 採之類白、造之則朱(上篇) 偃月作鼎爐、白虎爲熬樞、汞日爲流珠、青龍與之俱(上篇) 欲作服食仙、宜以同類者、植禾當以黍、覆鷄用其卵(上篇) 陽稟陰受、雄雌相須(中篇) 在義設刑、當仁施德(中篇) 太陽流珠、常欲去人、卒得金華、轉而相因、化爲白液、凝而至堅、金華先倡、有頃之間、解化爲水、馬齒闌干、陽乃往和、情性自然(中篇)</p> | <p>坎離(鉛汞) 朱(朱汞) 雄雌(鉛汞) 太陽流珠(靈汞)・金華(眞鉛)</p> |

鉛汞小考

| | | |
|--|--|---|
| <p>元・陳致虛 〔周易參同契 分章注〕</p> | <p>無名氏 〔道藏〕映字 ※5</p> | |
| <p>慈母育養、孝子報恩、遂相銜嚙、咀嚼相吞、嚴父施令、教教子孫 (中篇) 焚惑守西、太白經天、殺氣所臨、何有不傾(中篇) 河上媿女、靈而最神、見火則飛、不見埃塵、鬼隱龍匿、莫知所存、 將欲制之、黃芽爲根(中篇) 丹砂木精、得金乃并、金水合處、木火爲侶、四者渾沌、列爲龍虎 (中篇) 同類易施功兮、非種難爲巧(下篇) 佇思爲夫婦(上篇) 九五飛龍、天位加嘉、六五坤承、結括終始、醞養衆子、世爲類母 (中篇) 八歸六居(中篇) 慈母養育、孝子報恩、嚴父施令、教教子孫(中篇) 河上媿女、靈而最神、得火則飛、不見埃塵、鬼隱龍匿、莫知所存、 將欲制之、黃芽爲根(中篇) 丹砂木精、得金乃并(中篇) 本之但二物兮、末而爲三五(下篇) 陰火白、黃芽鉛、兩七聚、輔翼人(下篇)</p> | <p>原本隱明、內照形軀(上篇) 偃月法鼎爐、白虎爲熬樞、汞日爲流珠、青龍與之俱、舉東以合西、 魂魄自相拘、上弦兌數八、下弦艮亦八、兩弦合其精、乾坤體乃成 (上篇) 青龍處房六兮、春華震東卯、白虎在昴七兮、秋芒兌西四、朱雀在張 二兮、正陽雜南午、三者俱來朝兮、家屬爲親侶、本之但二物兮、未 而爲三五、三五并與一兮、都集歸二所、治之如上科兮、日數亦取甫 (下篇)</p> | <p>六(鉛)・七(汞)／二物(鉛汞) 上弦(鉛)・下弦(汞)</p> |
| <p>河上媿女(眞汞)・黃芽(眞鉛) 金(鉛)／龍(汞)・虎(鉛)</p> | <p>八(汞)・六(鉛) 媿女(陰汞之精)・黃芽(眞一之鉛) 金(先天之鉛) 二物(鉛汞) 陰火(砂)・黃芽(鉛)</p> | |

※1 無名氏注は、『周易參同契』本文の上篇のみを収録する二卷本(『道藏』容字號)と、本文全篇収録する三卷本(『道藏』映字號)と二種類存在する。陳國符氏は、容字號の無名氏注は唐代に成立したと推測している(『道藏源流續考』臺灣・明文書局、一九八三年、所收「中國外丹黃白法經訣出世朝代考」)。

※2 「金公」は鉛の意。

※3 無名氏注および陰長生注において、「黃芽」「金花」は汞を投じた鉛中から出たものとされている。

※4 漢代の陰長生に假託されるが、唐代の成立と見られている。※1所掲陳國符論文参照。

※5 欽偉剛氏は、『道藏』映字號の無名氏注は南宋中期以後の成立とする。注(10)所掲欽偉剛論文参照。

(12) たといえば、福井康順氏は、傳本、著者ともに明確ではないことから、現行の『周易參同契』は後世の偽作であるとしている。注(8)所掲福井論文参照。

(13) 『日月玄樞論』は、「虎者金也、龍者汞也」、または「殊不知黃芽雖出於鉛、實非鉛也」ともいう。

(14) 張元德撰『丹論訣旨心鑑』の他に、南陽張玄德撰『丹論訣旨心照五篇』と題するテキストが『雲笈七籤』巻六十六に収録されており、文字の異同が見られる。一〇一九年に成立した『雲笈七籤』に収録され、文中に北宋の馬自然の歌訣が見られることから、北宋前半頃の成立と推測される。

(15) 『雲笈七籤』本によって「礪砂」を補った。

(16) 『大丹鉛汞論』は唐の金竹坡の著作とされているが、『悟真篇』を引用するので、北宋以降の成立である。『大丹鉛汞論』第三に、鉛汞を説明して「張真人曰、不識真

鉛正祖宗、萬般作用枉施功。鍾離先生曰、抱太一之炁爲八石之首者、朱砂也。砂中有汞、汞乃砂之子也。抱太一之炁爲五金之首者、鉛也。鉛中有銀、銀乃鉛之子也。難取者、鉛中銀、易取者、砂中汞。鉛汞相合、煅鍊爲至寶」という。張真人は張伯端のことであり、そこに引かれる二句は『悟真篇』に見え、鍾離先生の語は『鍾呂傳道集』論鉛汞および『西山群仙會真記』眞鉛汞に見える。

(17) 「入藥鏡」「托黃婆、媒姪女、輕輕地、默默舉」。

(18) 「陰符經」「天地萬物之盜、萬物人之盜、人萬物之盜、三盜既眞、三才既安」。「三才相盜」の語は『悟真篇』にも見える。

(19) 『道樞』本は「至於餌一藥、服一丹、獲延駐長生者、目所見多矣」の一文を缺く。

(20) 『道藏』本『太上黃庭內景玉經』、『雲笈七籤』本『上清黃庭內景經』、『藏外道書』本『上清黃庭內景經』、『黃

庭經箋註」は「玉漿」を「玉英」に作る。

(21) 『太上玉珮金璫太極金書上經』玄眞洞飛二景寶經に「日色赤、月色黃」という。

(22) 拙著『不老不死の身體―道教と「胎」の思想』(大修館書店、二〇〇二年)、五「胎」の技法から内丹へ、参照。

寄稿規程

編集委員会

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。

二、枚数制限は以下のとおりです。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

国際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。

○外国語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員会が校正する場合があります。外国語は原則として英語とし、語数は三百語程度とします。

○外国語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、発行より三年経過した後にウェブ上で公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。(詳しくはホームページをご覧ください。)

三、原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。

四、内容は未発表のものに限り、採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷を御希望の方は、有償でPDFファイルまたは印刷冊子を作成いたします。

六、特殊製版(圖版・寫真版など)、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先 〒599-8501 大阪府堺市中區學園町一―一

大阪府立大學人間社會學研究科大形徹研究室内

日本道教學會事務局

電話 〇七二―二五四―九六二二

E-mail: info@taoistic-research.jp